

# 教職大学院におけるハイブリッド型双方向遠隔授業システムの活用に関する考察

—インタビュー調査を基に—

藤森 宏明<sup>\*1</sup>・杉本 任士<sup>\*2</sup>・森 健一郎<sup>\*3</sup>

## 概要

新型コロナウイルス感染対策のため、北海道教育大学教職大学院では双方向遠隔授業への受講形式が講義室からの対面方式とZoomでの受講方式となった。これは感染が終息しても、完全には元の状況には戻らないと考えられる。そこで、今後対面と遠隔によるハイブリッド型の授業が運営されることになった際、どのような課題を念頭に授業を行うことが求められるか、院生へのインタビュー調査による分析を行った。その結果、授業内容を深く理解するには、他者との意見交流が重要であり、自宅等からのリモート参加よりも講義室内での対面での参加の方が、意見交流等のコミュニケーションはより円滑に行われていることが再確認された。ICTツールの活用や、遠隔特有のコミュニケーションスキルの向上でこれらはある程度の解消が期待されるが、限界があることも示された。本院は現在大規模化し調査当時と異なる教育課程でもあるが、対面・遠隔双方の特徴を踏まえた教育課程の改革が一層期待される。

## 1 問題と目的

2019年12月に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス（いわゆる「コロナ禍」）によって、各高等教育機関はその対応を迫られた。例えば2020年5月20日時点では高等教育機関の9割以上が遠隔授業の実施を行ったとされる（文部科学省（2020））。この対応は対処療法では収まらず2022年度前期においてコロナ禍以前と同様の授業方針を掲げた大学等は55.5%にとどまっている状況にある（文部科学省（2022））。

今後この感染が「収束」し、やがて「終息」に向かったとしても、各大学ではコロナ禍前と全く同じように授業が実施されない可能性は大いにある。その理由は、各大学が感染対策として様々な授業方法の工夫の蓄積によって、大学における授業の在り方を変えたと考えられるからである。この点からは、遠隔授業の在り方が今後ますます問われて行くであろう。

だが、「遠隔授業」という用語自体は筆者らが所属する北海道教育大学教職大学院では新しいものではなかった。というのもこれまで本院では、4キャンパス（札幌・旭川・釧路・函館）を結ぶ双方向遠隔授業システムを中心に授業を行ってきたからである。ただしこれは、各拠点に教員を配置し、主担当教員を中心に授業運営をするものであった。さらには、教職大学院の根本理念が「理論と実践の往還」であったこともあり、講義一辺倒ではなく、グループワークを積極的に取り入れて授業実践

\*1北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）旭川

\*2北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）函館

\*3北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）釧路

が行われていた。すなわち、主担当教員の指示のもと、副担当教員と各キャンパスの院生による「キャンパス内活動」と、双方向遠隔授業システムを活用した「キャンパス間活動」による授業が、2008年度の教職大学院創設以来行われてきた。これが感染対策として2020年度前期はZoomによる遠隔授業のみ実施となり、2020年度後期以降は遠隔と対面のハイブリッドが中心となり、2021年度もこれが継続された。2022年度は原則は対面授業としつつも、感染不安等による自宅等からの遠隔受講を認めた。そのため、現在は2019年度まで使用していた従来型の双方向遠隔授業システムではなく杉本(2021)が紹介したハイブリッド型双方向遠隔授業システムによって行われている。今後は旧型の双方向遠隔授業システムではなく、新しい双方向遠隔授業システムの構築を改善事業として検討しているところである。これは、対面での学習とZoomに代表されるような遠隔授業での学習における教育上の特徴を踏まえた上でなされるべきであり、本研究の最大の関心はこの点にある。

では、コロナ禍において遠隔授業はどのような評価を得てきたのであろうか。例えば、学生への全国規模のアンケート調査を行ったものとしては文部科学省(2021)があげられる。これによると、オンライン授業の満足度については約7割が肯定的な評価を占めた。しかし各質問項目に着目すると評価は分かれた。例えば、オンライン授業の良かった点として、自分の選んだ場所で授業を受けられることや、自分のペースで学修できることが多く回答された一方で、悪かった点として、友人と一緒に講義を受けられない、レポート等の課題が多い、質問等双方向のやりとりの機会が少ない、対面授業より理解しにくいなどが多く回答された。

また、大学教員への全国規模のアンケート調査を行ったものとしては、金子(2021)があげられる。これによると、学習目的の達成という点からは遠隔教育の効果は対面教育に必ずしも劣るものではなかったとしている。一方で、学生の反応をみながら授業を進めること、授業中の学生の注意力を喚起し、さらに学生の参加を促すといった点では不十分であったことも示されている。また、遠隔授業は学習意欲の高い学生については高い効果をあげる一方で、意欲が低く、通信・家庭環境の十分でない学生にとって効果が低く、学習から脱落するおそれも生じることが分析結果から示唆された。これらの結果は対面に比べ遠隔授業では「場」の効果を代替できていないことを示唆するものといえる。

以上の調査は「オンライン授業」「遠隔教育」といっても同期型(Zoom等)と非同期型(録画配信等)を区別していない。前述のように教職大学院はグループワークを積極的に行ってきたという点に留意すると、同期型でグループ活動をオンライン授業で行った先行研究に着目する必要がある。

この点で言えば、例えば三井(2022)は、オンライン授業において8割の学生がグループ活動を円滑に進めていたと回答したことを示した。米満ら(2022)は、授業の雰囲気づくりを含めた教員からの明確な指示等の授業方法の工夫により、学生の活動が積極的になることをアンケート調査から示した。さらに山内(2021)は、双方向型のオンライン授業については工夫次第で対面授業に匹敵する効果をあげることができることをまとめている。岩田ら(2022)は、オンライン授業特有のコミュニケーション力やデジタルマナーの必要性を示した。そして志賀村(2021)は、対面授業でのスキルをそのままオンライン授業に生かそうとするとやりにくさが生じることを指摘した。

以上の先行研究からは、授業者がオンラインコミュニケーションツールを駆使し、受講学生がオンライン授業に適応していくことで、オンライン授業であってもグループ学習で教育効果を上げることができることを示唆するものといえる。

一方で、オンライン授業でのグループ活動における課題を指摘する先行研究も存在する。例えば筒井(2021)は、オンライン授業は知識の伝達については特に大きな問題はない一方で、異なる他者と相互に関わり合いながら学ぶための「場」をオンラインで構築することの困難さを指摘している。この点に関し

て三宅ら（2021）も、「クラスの一体感を作るのが難しい」（p.9）という学習上の問題を指摘している。また岡田（2021）も、対面授業の方がオンライン授業よりも集中できる教室で五感を使ったコミュニケーションでのディスカッションがしやすい点から、オンライン授業の双方向性の課題を指摘している。

オンライン授業での補完的な側面に関する先行研究としては、田渕（2021）が、授業後におけるインフォーマルな場での対話を含めたフォローによって個々の到達度の差を埋めるという点でのオンライン授業の課題を指摘している。また中村（2022）も、学生のモチベーションを維持するためには、オフラインでの交流が重要であることを示唆している。これらは授業外での対面でのつながりも学習に影響を及ぼすということを示唆するものと言える。

以上のように先行研究からは、オンライン授業の長所としての物理的な利便性や、ある一定程度の満足感等、そして短所としてのグループ活動での「場」の構築の困難さ等の課題は示されている。しかしながら、これらは一般論であり、これらの具体的なメカニズムを明らかにすることで、教育課程の改善や教育方法の工夫を行うことが可能となると考えられる。すなわち、対面授業とオンライン授業における学びの実態の違いのより具体的な把握である。そこで本研究では、質的調査（インタビュー調査）によって、このことを明らかにしていくことを研究の目的とする。

## 2 使用データ及び分析枠組

### 2.1 本研究の対象

#### (1) 調査時の北海道教育大学教職大学院における教育課程及び学習環境

本研究の調査対象は2020年度の北海道教育大学教職大学院である。調査時、在籍院生は1学年36名、2学年28名であった。各授業実施に際し4キャンパス（札幌・旭川・釧路・函館）の各拠点に主担当又は副担当教員が1名ずつ配置されていた。授業はクォーター制（年間4期）であり、各授業1科目2単位で、90分×15回を2コマ180分続きの7回プラス90分1回で実施された。

また、学修環境は、第1・第2クォーターの授業は、全ての受講者は自宅等から授業に参加する完全リモート方式であった。第3・第4クォーターの授業は、自宅からのリモートで参加とキャンパスでの受講による対面参加、いわゆるハイブリッド方式で行われた。ただし第3・第4クォーターは感染状況によってキャンパス単位でハイブリッド方式からリモート方式に切り替わったこともしばしば生じた。また、院生の感染の不安を考慮し、ハイブリッド方式であってもキャンパスでの受講／リモート方式のいずれの受講も認めた。札幌校においては第3・第4クォーターの必修科目は、受講者数が12名であったことと感染状況を加味したため全てリモート方式によって実施された。

#### (2) データの概要・収集について

分析に用いるデータは、本院に在籍する1学年の院生8名（札幌2、旭川2、釧路1、函館3）に行ったインタビューデータである。対象者の属性を表1に示した。

まず倫理的配慮として、調査実施に際し、本学の研究倫理委員会の審査を受けた。

次に調査設計上の留意点を以下に示す。調査対象者を選定する際には、キャンパス単位で学修環境（リモート参加／キャンパスでの受講の割合）が異なること、現職

表1 調査対象者の属性

対象	所属キャンパス	現職／学部新卒
A	札幌	現職
B	札幌	学部新卒
C	旭川	現職
D	旭川	学部新卒
E	釧路	学部新卒
F	函館	現職
G	函館	現職
H	函館	学部新卒

院生か学部新卒院生かで授業内容に対する捉え方が異なることに留意し、これらのバランスを考慮した。また、事前アンケートを実施し、インタビュー調査の協力を承諾した者に対し行った。

表2 インタビュー項目の概要

Q1. Zoomのみの授業とハイブリッド型の授業に関する全般的な質問をお伺いします。
(1) 前期のZoomのみの授業と、後期のハイブリッド型(Zoomと対面混在)の授業の、便利だと思うところ、不便だと思うところをそれぞれ教えてください。
(2) Zoomによるブレイクアウトセッションと、対面によるキャンパス内のグループ討議では、交流の質はどのように異なるとお考えですか。
(3) Zoomによるキャンパス間交流と、ハイブリッドによるキャンパス間交流では、交流の質はどのように異なるとお考えですか。
(4) (Zoomでの経験の受講生のみ) Zoomによるブレイクアウトセッションでの話し合いで、どのような満足感や困り感を持ちましたか。
Q2. 前期のZoomのみの授業と比較して、後期のハイブリッド型の授業では、授業の理解度はどのように異なるとお考えですか。
Q3. Zoomの機能についての質問をお伺いします。
(1) Zoomの機能(ホワイトボード・チャット・画面の共有等)の使い方、便利だったこと、苦労したことを教えてください。
(2) (1)によって授業でどのような影響がありましたか。
Q4. コロナ禍がおさまったら、①すべてZoom②すべて対面③ハイブリッド型、どの授業形態を取ることが教育効果が高いと思いますか。そしてその理由を教えてください。
Q5. その他 ハイブリッド型遠隔授業システムについて、自由に感じたことなどを教えてください。

データ収集は、令和2年1月から3月にかけてZoomによる面接で第1著者と第2著者によって行った。調査では倫理的配慮に関する説明を行った上で、半構造化インタビューを実施し、その際録音を行った。回答時間は約1時間程度で、インタビュー終了後に逐語録を作成した。インタビュー項目の概要を表2に示す。

## 2.2 分析の枠組・手順

分析においては、大まかな分析テーマとして、受講環境（キャンパスでの対面／遠隔（自宅等）とそのメリット／デメリットで4つの大カテゴリを設定し、このカテゴリに基づいて次のように分類・整理を行った。

- (1) 逐語録を執筆者全員で検討し、各逐語録の記録から、これらのカテゴリに基づき、切片を抽出した（単位化）。
- (2) 抽出した切片を類似した記述ごとに分け、小カテゴリとした（小グループ編成）。
- (3) (2)で単位化した小カテゴリを統合し、中カテゴリとした（中グループ編成）。

## 3 分析結果及び考察

### 3.1 生成されたカテゴリ

分析の結果として、147個の切片を抽出し、30の小カテゴリ、11の中カテゴリを生成した。

これらを（1）キャンパスにおいて対面で受講するメリット、（2）キャンパスにおいて対面による受講するデメリット、（3）自宅等でのリモートによる受講におけるメリット（4）自宅等でのリモートによる受講におけるデメリット別に示した（表3～表6）。

### 3.2 考察

本項では、前節での分析結果をもとに各表でのカテゴリについて、中カテゴリと小カテゴリの関係性について検討をしていく。

表3 (1) キャンパスにおいて対面で受講するメリット

中カテゴリ (切片数)	小カテゴリ (切片数)	具体的な語り (例)
柔軟性のある雰囲気がある (33)	意見交流 (11)	対面だと、これまで申してきましたように、相手の表情とかをリアルで見ながら、意見交換をすることができるので、ただ、意見を広げたりすることだけじゃなくて、より深い学びになっていくっていうようなところですかね。
	気軽に聞ける (7)	対面だったら、もうちょっとやっぱり聞きやすいし、ごめん今何やってたの、みたいになんていうことってとかってというのがすぐ聞けたと思いますね。
	話し合いがやりやすい雰囲気 (5)	普通に対面で一緒にいると、雰囲気でしゃべりたそうにしてるなっていうところとか、ストマス (ママ (学部新卒のこと)) さんたちの雰囲気で、振りやすかったりとか、そういうのはありますね。
	話し合いの深まり・深い学び (5)	一問一答型だったら、そんなにZoomとも変わらないんですけど、授業で出された課題とかに対しても、院生同士で相互の交流することで、深い学びができた。
	理解 (4)	対面の先生が、ここはこういうこととか、フォロー入れてくださったりするので、そういう点の理解度は、対面だと高くなるかなって思います。
	リアルホワイトボード (1)	話し合ったものをまとめたものを見るっていう点でいうと、やはり実際のホワイトボードでまとめているもののほうが見やすかったなというふうには思います。
非言語コミュニケーション (5)	大学教員の見取り (1)	私、ある程度の大学の先生からしても、この学生がどこまで把握してるのかっていうのを見取るために、やっぱり対面が望ましいかなと思いますね。
	授業中のつぶやき (3)	自分も担任で授業するときには、子どもたちのそういうつぶやきっていうのをすごく大切に聞いてんですけど。(中略) これを今話した話、俺はこう思うとかって、そういうつぶやきって非常に大事だなと思っていて。対面ではそれができるけども、Zoomではそれができないですよ。
	表情 (1)	対面のほうが、これまで述べてきたように、お互いの表情を見ながら、そして、建設的に成果物をつくっていくっていうことができるんですけど、
人とのつながりの実感 (9)	授業外のコミュニケーション (4)	後期は、これも結構、裏というか、釧路校の先生がたと、土曜日の講義だったらお昼一緒に食べたりだとかで話せる機会は増えたなって思います
	連帯感 (5)	対面だったら何となくみんながちゃがちゃ話しながら、きょう誰やる？とかってペン回せばいいだけなんで、ぼんぼんとできたんですけども。

### (1) 抽出されたカテゴリから見た「キャンパスでの対面授業について」

各キャンパスでの対面の授業においては、5つの中カテゴリと17の小カテゴリが生成された (中カテゴリは「【】」小カテゴリは「《》」で記した。)

メリットに着目すると、①【柔軟性のある雰囲気がある】については《意見交流》《気軽に聞ける》《話し合いがやりやすい雰囲気》《話し合いの深まり・深い学び》《理解》《リアルホワイトボード》、②【非言語コミュニケーション】については、《大学教員の見取り》《授業中のつぶやき》《表情》、③【人とのつながりの実感】については、《授業外のコミュニケーション》《連帯感》、によってそれぞれ生成された。これらの結果から、各キャンパスでの対面での授業においては、理解が難しい内容であっても、院生が気軽に周囲に聞いたりつぶやいたり態度を示し、これを大学教員や周囲の院生が把握することでその理解を助けたり、この動作を成立させるための雰囲気づくりがなされていたことがうかがえる。そしてこれは授業外でも行われることで、こういった活動を成立させる「場」が、各キャンパスの教室空間に存在していたと考えられる。本院は他拠点からの情報を受信側の拠点で集団で認識するため、こういった活動が頻繁に行われる傾向にある。これは一般の対面による講義形式ではあまり見られない状況であり、双方向で教室 (拠点) を結んで行われる授業の特徴ともいえる。

次にデメリットに着目すると、①【教室にある機器の操作性・性能への依存】については、《TAの操作画面・スライドコンテンツ》《機器 (音声)》《機器 (カメラ)》《機器 (デジタルデータ管理)》②【人間関係の固定化】については、《人間関係の固定化》によってそれぞれ生成された。これらの

表4 (2) キャンパスにおいて対面で受講するデメリット

中カテゴリ (切片数)	小カテゴリ (切片数)	具体的な語り (例)
教室にある機器の操作性・性能への依存 (14)	TAの操作 (1)	カメラ操作がちょっと、慣れるのが大変だったかなって。カメラ操作のリモコン、こうやって動かすんですけど、ボタンたくさんあって、もっと便利な使い方とかあるんだろうなと思うんです。でも結局、使ったボタンって移動するのとズームする機能だけなんです。
	画面・スライドコンテツ (4)	どうしても、文字がちっちゃくなってしまって、見にくいなあって。パソコン、Zoomでやってたときは、自分の目の前にパソコンがあってそこに映し出されるので、自分の見やすい大きさに拡大したり縮小したりというのができたんですけど。どうしてもテレビで映し出されるのを見なければいけないので、ちょっと辛いときがありました。スライドの作り方っていうか、によるかなあって思いました。
	機器 (音声) (5)	先生用のパソコンでマイクをいじってたんです、前のほうの先生で。その先生が1回ずつミュートを解除するんですけど、そのタイミングもちょっと遅いから
	機器 (カメラ) (3)	釧路校ってカメラが上のほうにあって、どうしても上から当たるというか、顔が見えないんです。こちら辺が映るんで。X先生いわく釧路校の反応がない。
	機器 (デジタルデータ管理) (1)	ただ、やっぱり対面になった途端に、プリントアウトしてくれてるので、データの保管とか、事前に資料を読むっていうのがなくなったなとは思いました。
人間関係の固定化 (4)	人間関係の固定化 (4)	函館校だとこの人はこういう考えとかって分かっちゃうので、発展はしにくいところはありますよね。

表5 (3) 自宅等でのリモートで受講するメリット

中カテゴリ (切片数)	小カテゴリ (切片数)	具体的な語り (例)
通学の負担感の軽減 (11)	通学の負担感の軽減 (11)	2番目に来る理由としては、やはり自宅にいながらできるってところが、すごく大きいと思うんですよ。自宅にいながらできるってことは、移動時間が掛からないですね。例えば、私の家から札幌校、行くのでも30分ちょっとぐらい掛かるんですけども。そうやって考えると、1日1時間はその時間が有効に使えるというか。大学院の学びっていうのは、もちろん授業が中心かとは思いますが、それだけではないとやはり思ってるので。移動時間って、結局無駄だと僕は思ってるので。一番何もする時間にならないというか、運転してるだけなので。その時間を自分の学びに有効に活用できるっていう点では、非常にZoomっていいなと思ってる。
アプリの効果的な活用 (9)	アプリ上の効果的な機能の活用 (7)	例えば、鈴木が書いてサトウさんが書いてタナカさんが書いてって、3人とも同じ考えだったっていうのを共有できるのは、Zoomのあのホワイトボードならではのなと思いました。これが対面だったら、同じですのひと言で、それが複数なのか、どうなのかっていうのは、見取することはできないので。ただし書きで書くっていうのも一つだと思うんですけど、この人も同じだったんだっていうふうには共感を得やすいかなって思いました。
	資料の見やすさ・音声の聞きやすさ (2)	Zoomじゃなかったら、ワードの画面とか、パワポの画面っていうのは、その場ですぐに共有して、みんなで見るっていうのはできなかったと思うんですけど、こういった、Zoomを使うことによって、いちいち、プロジェクターにつなぐ必要もなく、それぞれがパソコンを持ちながら、ワードとかパワポの資料を見ることができるところ。
他キャンパスとの交流がしやすい (5)	他キャンパスとの交流がしやすい (5)	対面で来てたのが、4名だけだったんですよ。札幌校は。だったので、結果、グループワークやったださいっていったら、その4名でしか絶対交流が生まれなかったんですよ。でも、Zoomになれば札幌校12名が、先生がたが組んだワークグループになるので、人が変わるっていう満足感というんですかね、満足感と言っているのか分からないですけども、そういうのは、あったかもしれないです。

表6 (4) 遠隔（自宅等での受講）におけるデメリット

中カテゴリ (切片数)	小カテゴリ (切片数)	具体的な語り (例)
理解の深まり (7)	討議の深まり (5)	Zoomの特徴って、同時に会話ができないっていうのがあると思うので、複数でブレイクアウトセッションすると、やはり順番待ちみたいな形になってしまうことが多いなっていうふうに思うんですね。例えばこれが3人いたり、4人いたり5人いたりすると、誰かがしゃべるときは待たなきゃいけない。また、次の人がしゃべるときも待たなきゃいけない。で、自分の番になったときに話すっていうことの繰り返しになるので。そうすると、なかなかテンポのいい話し合いができないので。簡潔にいうと時間が足りなかったなっていうのが一つと。そのような状況なので、なかなか規定された時間の中で深まるような話し合いまで至らなかったことが多いなというふうに思います。
	理解の困難さ (2)	ホワイトボードは、結構、視覚で出てくるので、その分、説明を聞くっていうよりは、見る方向に集中してしまって、どこがポイントなのかっていうのを見失ってしまうことがあったなって。
個人の機器の性能や操作性・性能への依存 (22)	機器の操作性に左右される (21)	実際に直接、会ってお話ししたわけではなかったんで、その方がどういう人なのかっていうのを自分が知りたかったっていうのもあったと思います。もう少し、その人の発言や人の話を聞いた後の対応とか返答内容を見て、その性格を測りたかったなっていうのもあったので、ちょっと控えめになれたZoomだったのかなっていうふうな。そういう引くこともできてしまう講義形態なのかなっていうふうに感じながら受講させてもらいました。
	疲労感 (1)	画面見て、ずっと過ごすっていうのは疲れるなっていうの感じました。休憩時間もあったんですけど。やはりリラックスしながら、聞いてくださっていうふうにおっしゃってくれる先生がたもたくさんいたんですが、どうしても先生方、自分も含めて結構真面目なところがあるので、ぐっと画面に集中してしまうところがあるので。
柔軟性に乏しい雰囲気 (26)	人間関係の形成の困難 (6)	Zoomだと、自分がこうやって思い付いたこととか確認したいことを確認しないまま、やっぱり流さざるを得ないですね。こそっとチャットで聞くと、チャットで聞く人にも、ちょっと迷惑がかかるんじゃないかとか、その人の作業も止まるんじゃないかかっていう心配があったので。講義の中では質問するにしても、やっぱり昼休憩とか、そういうちょっとした休憩のときでしかやりとりはしにくかったんですよ。
	参加意識が高まらない・疎外感 (3)	はい。そんなときに、旭川校を家で見ると、あ、なんか疎外感みたいな。何ていうんですかね、参加できてるんだけど、参加できないんだなっていう。だから、やっぱり学んでる感というよりは、第三者の視点みたいな。学んでるんですけど、やっぱり生身の人間が隣にいたりすると、ちょっとした雑談っぽいやつでも、実は本質をつかんでいたりして、そこで理解が増したりするんですけど、Zoomだと、え、これどういうことですかね、とかいうフランクな感じの質疑応答ができないので、そこがちょっとマイナス面。Zoomのマイナス面にもなっちゃうかもしれないですけど。(Zoom受講が多かった) 札幌校の方々、結構、大変だったんじゃないかなって思います。
	場の空気や雰囲気 (8)	そうなるって課題があって、みんなそれぞれやはり話したい思いだったりとか考えがあっても、さっき言ったような順番待ちになってしまうというか。誰が先に話すかとか、この10分の中どう進めるかとか。そういうところを考えてしまうと、言いたいことも言えなかったりだとか。
	質問しにくい (気軽に聞けない) (7)	私、これは、交流の質自体に、あんまり違いは感じませんでした。ただ、対面であれば、先ほどのメモを取ったりして慣れた形で話に参加できたんですけど。Zoomの場合、他者の表情を読み取ることも力を注がねばならないので、メモの質が低くなってしまって。それが、交流の質にも少なからず、私はやっぱり影響したなと思います。この部分は、全員に当てはまらない感想なのかもしれません。
	役割分担が柔軟にいかない (2)	Zoomだと気を抜こうと思えばいくらでも抜けるのかなっていう。誰かがしゃべってくれるのを待つみたいなのところは見え隠れして。なるべく大体いつも話を回す人って出てくるので、そういう方が話をうまく振ったりしてやったり、私も我慢できないほうなのでしゃべっちゃったりするんですけど

結果から、教室で行う授業においては音声もあまり良好ではなく、ハウリング等のトラブルも頻繁に生じたことから、TAの役割が重要であったことや、受講生が少ないキャンパスの教室でのグループ活動では、役割分担や交流内容が固定化されるという課題が生じていたと考えられる。

## (2) 抽出されたカテゴリから見た「遠隔（自宅等での受講）」について

遠隔（自宅等での受講）での授業においては、6つの中カテゴリと13の小カテゴリが生成された。メリットに着目すると、①【通学の負担の軽減】については、《通学の負担感の軽減》、②【アプリの効果的な活用】については、《アプリ上の効果的な機能の活用》《資料の見やすさ・音声の聞きやすさ》、③【他キャンパスとの交流のしやすさ】については、《他キャンパスとの交流がしやすい》によってそれぞれ生成された。これらの結果から、①については例えば札幌校では大都市の郊外にキャンパスがあり、特に冬季は通学に1時間以上を要する院生も少なくないが、これを軽減できたことが示されたと考えられる。また、②は教室よりも自宅受講の方が資料が読みやすく音声も鮮明であった院生が多かったことや、③では他拠点の院生と直接Zoomで交流ができたことがうかがえる。物理的に明らかに対面での交流が難しい他者との交流では、リモートのメリットが発揮されたと言える。

次にデメリットに着目すると、①【理解の深まり】については、《理解の困難さ》《討議の深まり》、②【柔軟性に乏しい雰囲気】については、《人間関係の形成の困難》《参加意識が高まらない・疎外感》《場の空気や雰囲気》《質問しにくい（気軽に聞けない）》《役割分担が柔軟にいかない》、③【個人の機器の性能や操作性・性能への依存】については、《機器の操作性に左右される》《疲労感》、によってそれぞれ生成された。これらの結果から、①②でリモート特有のコミュニケーションスキルが求められるが、それには限界があり、対面には劣る側面が示されたと言える。特に《場の空気や雰囲気》は対面とは大きく異なることで、他者と関わることによる学びの効果は非常に課題を抱えていること、③ではリモート特有のコミュニケーションに関する問題が析出されたといえる。

## (3) (1)及び(2)の関係性から示唆されること

前項までの検討を踏まえつつ、本院の対面型の授業とZoomによるリモート型の学びの違いにおいて、どのようなメカニズムが働きこれらのカテゴリが生成されているかを本項では考察する。

第一には、院生同士、院生と教員、他拠点との関係性に関する授業内でのコミュニケーションの在り方に着目したカテゴリが生成されているのではないかということである。例えば、キャンパスでの対面では、近隣他者との関わりが参加意欲を高め、理解も深める側面もあれば、キャンパスでの人数の少なさから役割が固定化し、学びが深まらない。一方で、他キャンパスと交流によって、自拠点の対面のようなコミュニケーションは行えないが、それでも自拠点のみでの交流の欠点を補いたいという側面である。

第二には、遠隔（自宅での受講）は、対面には劣る側面もあるが、機器の性能や機能を効果的に用いることである程度対処していた側面と、ハイブリッド方式の教室の音響機器が不十分であった点が示されたのではないかということである。前者は、他大学同様本院でも少しでも効果的な授業となるよう、さまざまな創意工夫がなされたということ、一方後者は、対処療法的にハイブリッド方式の双方向遠隔授業システムとしていることから、これを改善する必要性が院生の語りからも示されたといえる。

第三には、遠隔（自宅での受講）には、時間短縮等の利便性が先行研究同様、明確に示されたと言えることである。確かに遠隔（自宅での受講）は対面に比べ授業内容等の理解が劣る側面が存在する

が、それを以てしても余りある利便性である。近年はオンライン開催の研究会や学会・会議も多くなってきているのはこういった側面も影響していると言える。

以上の考察から、こういったカテゴリが生成される根本の要因としては、教職大学院での毎回の授業でどのような学びを求めているかが起因していると考えられる。求める内容が、知識理解に留まるのか、あるいは他者との交流によってでないで得ることのできないものであるのか。こういった点が、遠隔（自宅での受講）と対面での学びへの姿勢やその評価をも規定していると考えられる。

今回の回答者のほとんど全員が「(オンライン授業よりも)対面の方が望ましい」と回答をしていた。教職大学院のカリキュラムは共通に開設すべき授業科目（いわゆる（共通5領域））を基盤としており、学修する領域が修士課程よりも広範囲である。そのため、科目によっては院生にとっては関心の薄かった領域も学ぶことも少なくないだろう。だが、授業での他者との交流によって、新たな課題を自分なりに発見し、さらに学びを深めるといったような好循環が、対面の授業の方では多く見いだされたのではないだろうか。ただ、一方で、学びたい内容が対面での交流を用いなくてもよい場合は、遠隔（自宅での受講）でもよい場合も存在する可能性もある。以上の点を踏まえつつ、教職大学院においては、教育課程上の目標を自覚した上で、遠隔（オンライン／オンデマンド）・対面等の多様な授業方法の模索やこれを充実させるためのICT機器の活用やその整備を行うことが望ましい。本研究では、この点において、遠隔（オンライン）の可能性と限界、対面授業での長所を再確認できたのではないかと考える。

#### 4 まとめにかえて

以上、本研究ではコロナ禍によって、Zoomによるハイブリッド型の授業を行うことを余儀なくされたことに着目し、本院におけるリモート型授業と対面型授業の是非について検討してきた。その結果、得た知見は端的には、教職大学院に期待する教育内容を土台にした対面と遠隔の学びの実態における長所と短所が見出されたのではないかと考えられる。このことは、教職大学院の理念を教員と院生が共有して学びを進めていくことがいかに重要であるかを再確認させるものである。

本院では、教職大学院制度の理念に即し、教育現場の複雑な教育現象に対し多角的な視点から課題を把握し解決できる教員像を想定していることから、他者との交流、すなわちグループ活動を大事にしてきた。これを基本としつつ、この学びの質を保証するような教育環境の整備と教育課程の設計が必要になり、これにふさわしい対面・オンライン授業の関係性を考えていくことが望まれる。特に本院においては、この調査の次年度である2021年度から、院生の定員も45名から80名と規模が拡大し、1回の授業も180分から90分単位が中心となった。そして授業形態は対面を原則としつつも場合によっては自宅等からのリモートでの受講を認めている実態がある。このことは本研究で示したような知見を踏まえると、本院が重視してきたグループ活動での学びが損なわれている可能性がある。よって、現在の状況において、どのような教育実践上の課題が存在しているかの把握は引き続き必要である。今後の課題として新双方向遠隔授業システムによる新たな教育方法が実施される際に検討すべき点と言える。

【謝辞】 本研究に際しインタビュー調査に協力していただいた院生の皆様に感謝申し上げます。

## 【引用文献】

- 岩田京子・中島千優・島弘美, 2022, 「多人数必修授業におけるオンライングループ活動の実践」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第54号, pp.125-129.
- 金子元久, 2021, 「コロナ禍後の大学教育—大学教員の経験と意見」『東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター (CRUMP)』
- 三井規裕, 2022, 「オンライン同時双方向型グループ学習の促進を目的とした授業デザインの検討」『関西学院大学高等教育研究』第12号, pp.115-121.
- 三宅祐司・久野かおる・小出寿彦・津坂朋宏・波村慎太郎, 2021, 「Zoomによるオンライン授業の振り返りと課題」『日本語教育方法研究会誌』27 (1), pp.8-9.
- 文部科学省, 2020, 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (令和2年5月27日)」 ([https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt\\_kouhou01-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf)) (2022年9月30日確認)
- 文部科学省, 2021, 「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 (令和3年5月25日)」 ([https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)) (2022年9月30日確認)
- 文部科学省, 2022, 「大学等における令和4年度前期の授業の実施方針等に関する調査及び学生の修学状況 (中退・休学) 等に関する調査の結果について (周知) (令和4年6月3日)」 ([https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt\\_kouhou01-000004520\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf)) (2022年9月30日確認)
- 中村周史, 2022, 「コロナ禍における大学生の学習意欲に関する研究」『総合政策研究』第30号, pp.59-67.
- 岡田佳子, 2021, 「学生からみたオンライン授業のメリットとデメリット—オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて」『長崎大学教育開発推進機構紀要』No.11, pp.25-41.
- 志賀村佐保, 2021 「オンライン授業の実践から見えた日本語学校の対面授業の意義」『日本文学ノート』第56号, pp.1-18.
- 杉本任士, 2021, 「Zoomを用いた遠隔授業システム構築のための初期対応—北海道教育大学教職大学院におけるZoom導入報告」『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要』第11号, pp.1-12.
- 田淵聡, 2021, 「教職大学院におけるオンライン授業の効果についての一考察—遠隔授業アプリ「G-Suite」を活用した同時双方向の講義・演習を通して」『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) 年報』11, pp.113-120.
- 筒井佐代, 2021 「大学初年次の少人数セミナー型科目におけるオンライン授業の実践—オンライン授業における「場」の共有に向けて」『大阪大学高等教育研究』第9号, pp.77-87.
- 山内祐平, 2021, 「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』第21号, pp.5-25.
- 米満潔・古賀崇朗, 2022, 「オンライン授業へのアクティブ・ラーニング導入のためのオンラインコミュニケーションツールの利用と評価」『佐賀大学全学教育機構紀要』第10号, pp.25-37.